

【要因動向分析の概要】

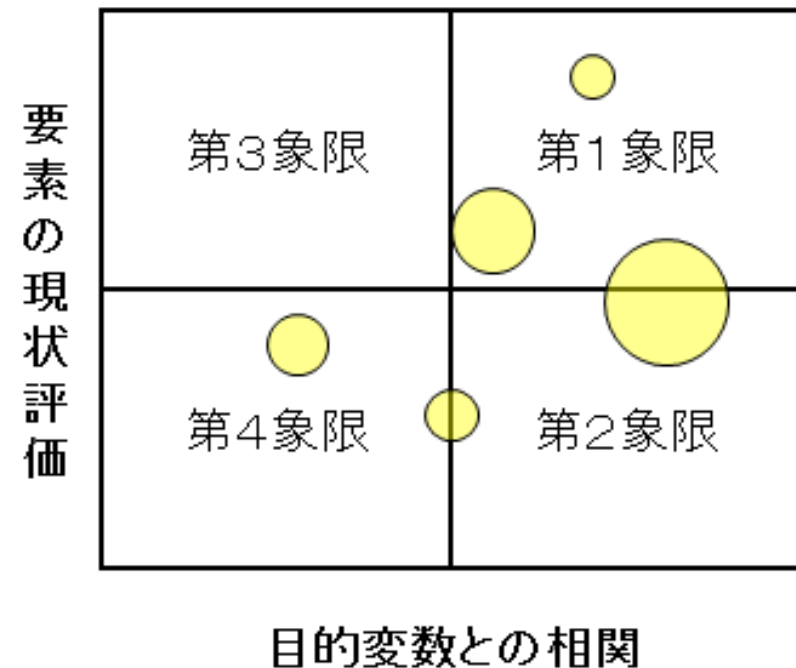
～今、どの要素に注力すべきかを3つの観点で明らかにする～

当分析は、目的とする対象(目的変数)とそれに影響を及ぼすと考えられる要素(説明変数)の①現状評価、②相関関係、③評価の伸び、これら3つの情報を一枚のバブルチャートで示します。

狙いは冒頭に示したように、目的へ向けて、今、大切な要素はどれかを一目瞭然にすることです。

目的とする対象の ”違いを生み出す勢いのある違い” がひと目で分かるように工夫していますので、効果性と効率性が同時に求められる戦略立案や、施策の優先順決定場面で役立ちます。

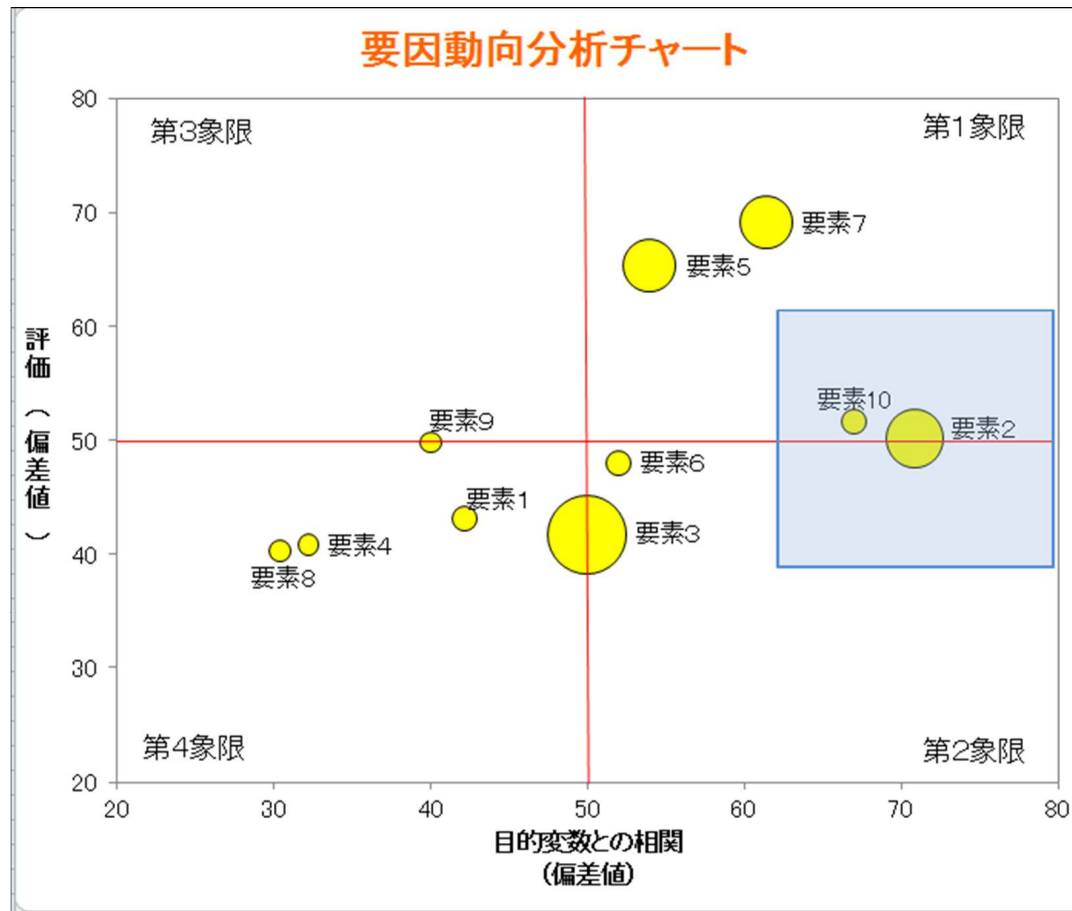
要因動向分析チャート



要因動向分析のアウトプットイメージ

【概要】

第1象限に位置する要素のうち、それ自体の評価が高く、かつ、目的変数との相関も高い「要素7」は理想的な要素です。また、それ自体の評価はそれほど高くないけど目的変数との相関が高い下記の水色網掛け領域内に位置する要素は、重点課題です。その中でも、評価の伸びが著しい大きい円の要素(下記では要素2)は、**現段階における要因**と考えられます。各軸を共通尺度である偏差値で表記していますので、軸間における値の差や合計にも意味があります。例えば、総合的に見てどの要素が最も大切かをみるには、偏差値の合計が最大の要素を明らかにすればよいでしょう。当事例では要素2(190.8)が該当します。



No.	要素	X軸 目的変数との 相関 (偏差値)	Y軸 評価 (偏差値)	円の大きさ 評価の伸び (偏差値)	偏差値 合計
1	要素1	42.2	43.1	47.8	133.1
2	要素2	70.8	50.1	69.8	190.8
3	要素3	50.0	41.8	56.6	148.4
4	要素4	32.2	40.8	39.0	112.0
5	要素5	54.0	65.3	56.6	175.9
6	要素6	52.0	48.0	47.8	147.8
7	要素7	61.4	69.1	56.6	187.1
8	要素8	30.4	40.3	39.0	109.7
9	要素9	40.0	49.8	39.0	128.8
10	要素10	67.0	51.6	47.8	166.4

注1: 円の大きさは、要素の評価の伸びを表しています。注2: 評価の伸びの代わりに、要素の重視度を用いてもよいでしょう。この場合、要素に対する心理的な動向を表すと考えられます。

【お問い合わせ等について】

このたびは当資料を最後までご覧頂き、ありがとうございます。
内容に関するご質問等は、下記までお願い申し上げます。

弊社はデータ集計・分析を行っている会社です。お預かりしたマーケティングデータ、アンケートデータ、販売活動データ等をもとに、課題解決に役立つ手がかりを導き出すお手伝いをしております。

上記のようなデータについて、何かお困りごとや課題はございますでしょうか？

微力ではありますが、当冊子をご覧頂いたお礼として無料相談を承りますので、宜しければご連絡下さい。

〒 101-0034

東京都千代田区神田東紺屋町30番地 サンハイツ神田ビル8F

株式会社データム

電話：03-3255-6851

電子メール：info@dtum.co.jp